



発掘でわかった！
枚方のむかしむかし



会場：輝きプラザきらら2階 展示ルーム
 期間：令和2年8月5日（水）～
 令和3年2月28日（日）
 主催：枚方市 観光にぎわい部 文化財課

🌀 はじめに

この枚方の地に生活を営んだ人々がどのような文化を育んだか、発掘調査によって出土した遺物をもとに、その歴史を学んでいきたいと思ひます。

🌀 旧石器時代（後期旧石器時代）

日本列島における人類の足跡は旧石器時代に遡ります。彼らは土器を持たず、石器などを用いて、狩猟・採集の生活を営んでいました。旧石器時代は、世界史的に前期・中期・後期に区分されていますが、日本列島での確実な例は後期（約35,000～16,000年前）の段階です。なお、この時代は土器がなかったことから、かつて「無土器時代」あるいは「先土器時代」とも呼ばれました。



尖頭器と有舌尖頭器
（楠葉東）

市内では後期に属するナイフ形石器と呼ばれる石器が、藤阪宮山遺跡や楠葉東遺跡などから出土しています。石材はサヌカイト製が多くみられますが、チャート製や水晶製のものもあり、主に槍の先に取り付け、狩猟具として使用されたと考えられています。

また、尖頭器や有舌尖頭器なども見つかっています。旧石器時代の遺構としては唯一、炉跡が藤阪宮山遺跡で検出されています。

🌀 縄文時代

日本列島における土器の出現は、およそ16,000年前といわれています。土器を使うことで、食材を煮炊きできるようになり、人々の食生活は飛躍的に向上しました。多くの土器に縄目の文様が施されていることから、この時代の土器は縄文土器と呼ばれています。

縄文時代時期区分

区分	草創期	早期	前期	中期	後期	晩期
時期	16,000～ 12,000年前	12,000～ 7,000年前	7,000～ 5,500年前	5,500～ 4,500年前	4,500～ 3,300年前	3,300～ 2,400（3,000）年前



穂谷式土器
(穂谷)

市内では穂谷川流域に多くの縄文時代の遺跡があり、縄文土器が出土しています。そのうちの1つ、穂谷遺跡では、早期の穂谷式と呼ばれる、山形の押型文を付けた土器が見つかっています。

九頭神遺跡では、中期の深鉢の口縁部が出土しました。また、交北城の山遺跡や岡東遺跡では、晩期の土器がたくさん見つかっています。

この時代になると、弓矢を使って狩猟をするようになります。矢の先に取り付ける石鏃のほか、石器の種類も増加し、石棒や石剣などの祈りを捧げるために使われたものもあります。なお、市内では縄文時代の建物は見つかりませんが、交北城の山遺跡で埋甕が、穂谷遺跡や小倉東遺跡では土坑などが検出されています。

弥生時代

今からおよそ2,400年前(3,000年前頃という見解もあります)の縄文時代の終わり頃、大陸(朝鮮半島)から北部九州に稲作(水稻)が伝わりました。稲作とともに伝わった新しい文化により、人びとの生活は大変革を遂げます。この新しい文化を弥生文化と呼び、稲作農耕に用いる木製品や石器などのほか、金属器も伝わりました。土器についても、狩猟・採集社会から農耕社会へと変化する過程で、器種構成(器の種類)や製作技法(土器のつくり方)も変化を遂げ、弥生土器が成立しました。

弥生時代時期区分

区分	前期	中期	後期
時期	紀元前4世紀～前2世紀	紀元前2世紀～紀元後1世紀	紀元後1世紀～後3世紀



弥生土器大型壺
(田口山)

市内では、弥生時代前期の柱穴や土坑が招提中町遺跡で確認されているほか、淀川河床遺跡(磯島先遺跡)や岡東遺跡などで前期の土器が出土しています。

中期前半になると、竪穴建物・方形周溝墓などが交北城の山遺跡をはじめ、各所で確認されています。中期後半には丘陵上にも集落が成立し、その代表例は田口山・長尾谷町・星丘西遺跡などです。中でも田口山遺跡と星丘西遺跡では、石製や鉄製の武器類がこれまでの調査で多く出土しています。

後期になると、丘陵上や台地縁辺部に集落が急増します。村野・ごんぼう山・長尾西・藤阪東・出屋敷・鷹塚山・藤田山・茄子作遺跡などがあり、多くの土器類などが出土しました。鷹塚山遺跡では小型重圏文仿製鏡、異形の土器(皮袋状土器)や分銅形土製品など特異な遺物が出土しています。

古墳時代

古墳時代とは土を盛った墓（古墳）が造られた時代のことで、当時の豪族（有力者）のものが大きく特徴的です。3世紀中葉以降に、西日本各地で築造され始めました。特に奈良東南部の古墳は規模が大きく、その背景には、ヤマト政権と呼ばれるような政治的組織の存在が考えられています。古墳そのものは8世紀初頭頃まで築造されますが、古墳時代は概ね6世紀末までの時期を指します。

古墳時代時期区分

区分	前期	中期	後期
時期	3世紀中葉～4世紀	5世紀	6世紀

前期では天野川流域に万年寺山古墳・禁野車塚古墳・藤田山古墳などがみられるほか、穂谷川流域に牧野車塚古墳が築造されるなど、活発な造墓活動が展開されます。集落は船橋・村野・津田トッパナ・藤阪南・九頭神・渚遺跡など、川べりの地に多く営まれます。

中期になると市内では大型前方後円墳の築造はみられなくなりますが、楠葉古墳・日置山古墳・小倉東古墳群E支群・姫塚古墳・中振丸山1号墳などが築造され、交北城の山遺跡や出屋敷遺跡などで集落が営まれます。

当該期には朝鮮半島伝来の須恵器生産が始まりますが、茄子作遺跡では朝鮮半島とのかかわりが指摘される韓式系土器がまとまって出土したほか、初期須恵器を生産した窯（茄子作窯）の存在が想定されています。また、交北城の山遺跡でも韓式系土器や初期須恵器などが出土しています。

後期では、禁野上野古墳・白雉塚古墳・宇山古墳群・中振丸山2号墳などが築造されるほか、九頭神・星丘・藤田町の各遺跡では集落が営まれ、掘立柱建物などが検出されています。



円筒埴輪
(姫塚)

古代（飛鳥・奈良・平安時代）

古墳時代の後期には朝鮮半島から仏教が伝わり、併せてさまざまな先進技術ももたらされました。これによって寺院建立などの仏教文化が花開き、飛鳥を中心とした地域に広まりました（飛鳥時代、概ね7世紀）。その後、8世紀初頭に都は藤原京から平城京へと遷り、律令制による中央集権国家体制が整いました。この時代を奈良時代と呼びます。8世紀後葉に長岡京・平安京へと相次いで遷都され、貴族政治が華開きます。その後、平家が滅亡する12世紀後葉までを平安時代と呼びます。

古代の枚方では寺院や集落、生産遺跡など多くの遺跡の存在が明らかとなっています。

寺院では九頭神廃寺・百濟寺跡・中山観音寺跡・蹉跎廃寺などがあり、集落としては船橋・九頭神・招提中町・藤阪・禁野本町・村野南遺跡などの諸遺跡があり、九頭神・禁野本町遺跡はそれぞれ、九頭神廃寺と百濟寺にかかわる集落として位置づけられます。



奈良三彩瓶
(禁野本町)

特に禁野本町遺跡は百濟寺を建立した百濟王氏の本貫（本拠地）と考えられ、百濟寺の中軸線に合致した南北道路やそれに交わる東西道路など、都のような都市的要素を持つ遺構が検出されています。また、招提中町遺跡は出土瓦（大山崎瓦窯*産）などから、嵯峨天皇の交野行幸・狩猟にかかわる施設であった可能性が指摘されています。

生産遺跡では、四天王寺の創建瓦などを焼成した楠葉・平野山瓦窯群や平安京西寺に屋瓦を供給した牧野阪瓦窯のほか、楠葉瓦窯などがあり、藤阪遺跡と楠葉東遺跡では土器生産が行われました。

*大山崎瓦窯：淀川の対岸、京都府大山崎町に所在します。嵯峨朝における平安宮の修造や、嵯峨天皇の離宮造宮の瓦を供給するために操業された大瓦窯群で、史跡に指定されています。

※市役所本館1階（南東出入口）の展示コーナーで

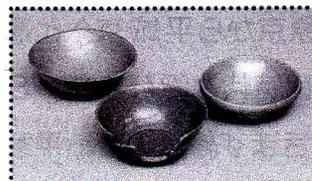


中世（鎌倉・室町時代）

楠葉野田遺跡の出土品を展示しています。

12世紀末、源頼朝によって鎌倉幕府が開かれ、武士による政治が始まりました。封建制を土台とする社会となり、地方が力を持つようになりました。この時代を鎌倉時代と呼びます。14世紀前半には、鎌倉幕府を倒した足利尊氏が京に室町幕府を開きます。南北朝の対立期を経た後、各地の武将はさらに力を蓄え、応仁の乱（1467～77）以降、群雄が割拠する戦国時代となりました。織田信長によって元亀4年（天正元年・1573）に将軍足利義昭が京を追放されるまでを室町時代と呼んでいます。このような経緯から、室町時代は南北朝時代・室町時代・戦国時代に大別されることもあります。

市内では、津田トッパナ遺跡や交北城の山遺跡、九頭神遺跡などで、土豪の館を思わせる建物や屋敷墓などが確認されています。交北城の山遺跡では、中国製白磁碗と土師器皿



中国製青磁碗・白磁碗
(九頭神・交北城の山)

2枚が副葬された木棺墓が検出されました。また、九頭神遺跡では、瑞花双鳳八稜鏡と刀子を副葬した木棺墓や、羽釜を蔵骨器に転用した墓（火葬墓）などもありました。この頃の火葬墓には、羽釜や鍋など日常雑器を蔵骨器として用いた例が枚方以外の遺跡でも検出されています。

中世末期の遺跡としては枚方寺内町遺跡があり*、備前焼大

甕が30基以上並び、甕倉が確認されました。枚方寺内は、大坂石山本願寺寺内の縮小版といわれ、地理的にも本願寺教団の影響を強く受けたとされています。甕倉は激しい火災で焼亡しており、対立していた織田信長軍などの攻撃を受けたのでしょうか。また、隣接する枚方上之町遺跡では最近の調査で、枚方寺内に関係する人々を火葬した土坑が確認されました。

また、この時代、楠葉周辺では土器作りが盛んに行われていました。時代は少し遡りますが、『梁塵秘抄』（平安時代末期の今様（はやりうた）を集めたもの）に「土器作りの里」として、その名がうたわれているほどです。楠葉東遺跡では窯跡や採土坑（粘土を採取した土坑）が見つかるほか、土師器・黒色土器・瓦器などが大量に出土しています。その後、生産の拠点は少し南の楠葉野田遺跡に移動したと考えられています。窯跡は確認されていませんが、焼き損じた土器類を捨てた物原（不良品の捨て場）が見つかり、大量の土師器や瓦器などが出土しました。

*寺内町：浄土真宗系寺院を中心に形成され、堀や土塁で防衛された自治都市のことをいいます。

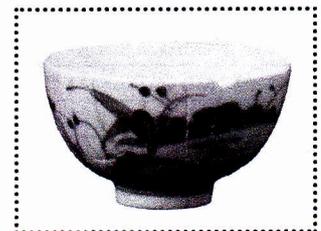
※市立枚方宿鍵屋資料館では、
枚方宿遺跡の出土品を展示しています。

近世（江戸時代）

この時代を代表する遺跡は、枚方宿遺跡です。文禄3～5年（1594～96）、豊臣秀吉は伏見～大坂間の水陸交通路の整備を断行します。この時淀川左岸に築かれたのが文禄堤で、のちに堤上の道が京街道となります。三矢を中心として、堤の両側に町場が形成されました。これがのちの枚方宿です。枚方宿遺跡では、堤の両側に土盛りをして町家が建てられたことが発掘調査でわかっています。以後、淀川の水位上昇などに伴い、幾度となく嵩上げが繰り返され、町場は変化していきます。

枚方宿遺跡からは陶磁器類が多く出土します。現在、鍵屋資料館で展示されている「茶碗屋」の陶磁器類は、18世紀初頭頃の火災に遭ったものです。当時の庶民向けの陶磁器構成が分かる一括資料で、全国的にも貴重なものです。

枚方宿遺跡以外にも、九頭神遺跡で比較的多く出土した陶磁器類が出土しています。出土した陶磁器類を比較すると、枚方宿遺跡とさほど差はなく、同じような経済状態であったと考えられます。



肥前磁器染付碗
（枚方宿）